

2024年4月28日 No. 3717

先週の講壇から

“ひとり立ち”

マルコによる福音書 第2章1節～12節

聖句「中風の人に『あなたの罪は赦される』と言うのと、『起きて、床を担いで歩け』と言うのと、どちらが易しいか。」(2:9)

1. 《新しい教会》 20世紀以降、女性信徒から「フェミニスト神学」、中南米やアジアの教会から「解放の神学」「民衆の神学」が生まれました。「神学」と言っても大学の研究室の学問ではなく、社会変革運動の中から生まれた問題提起でした。欧米中心、白人中心、男性中心のアカデミズム、伝統的な聖書理解には欠けていた視点から、聖書の読み直し、教義の再検証が求められているのです。既成の教会にとっても、気付かされることが沢山あるのです。
2. 《枠組の教会》 映画『ジャンヌ・ダルク』(1999年)では、ある若い女性が自由にイエスさまの御声を聴くことが出来る、それが教会の権威を損なうこととして、彼女は「魔女」として火焙りにされます。ジャンヌが教会から訴えられたのは、教会制度を通さないで、直接、神の声を聴いたからです。教会は、神の自由な働きを認めることが出来ませんでした。イエスさまに批判の目を向ける律法学者たちも決して「不信仰」な人たちではありません。聖書研究と信仰の布教に自らの生涯を奉げた敬虔な人たちです。但し、彼らは律法の「枠」の中であって、その権威こそが依って立つ所です。しかし、イエスさまの御言葉は「枠」を超えて、罪の赦しを宣言してしまいます。学者たちには受け入れ難いことなのです。
3. 《癒しの教会》 中風の人と4人の友は、何としてでもイエスさまにお会いしたかったのです。けれども、イエスさまの周りは、律法学者や物見遊山の人たちが取り囲んでいて、側に近付けません。伝統的な制度や儀式や神学が、あるいは、私たちの自身の態度が、主を求める人たちにとって「敷居を高く」してはいないでしょうか。屋根を外して、病人を吊り下げた人たちの行為に、屋内の人たちは憤慨しますが、イエスさまは彼らの心(愛と友情)を見て居られました。そこで癒しが与えられるのです。教会は聖霊(神の御言葉と御業)に触れる所ですから、生活で傷ついた魂が癒される場であるはずです。自らの手に何一つ頼むことの出来ない、裸の人間として、ありのままの姿で、神の御前に立つ。それが「礼拝」です。そこに立ち返ることが、本当の意味での「ひとり立ち」なのです。

朝日研一朗牧師